文 レインボー・ネルソン ｜ 写真 ピア・リベロラ

奇跡の聖堂

コロンビアの南縁に位置する、ラス・ラハス聖域。戦略上重要な峡谷に
架かるこの聖堂ほど壮観で、畏敬の念を抱かせる教会は、世界でも類を見ない。
幾度も再建され、拡張されたこの建築物を、毎年何千人もの巡礼者が訪れ、
俗世から隔絶されたロケーションと奇跡の宝物に魅了される。

（右）ステンドグラスの窓を
囲む白い飾り枠。
（上）巣を守る雌鶏を描いた
ステンドグラス。
（下）階段の壁面は、奇跡の
恩恵を受けた信者が残した
銘板で覆われている。

［前見開きページ］
遠景（左ページ）および下から
見た写真（当ページ右）に
あるように、ラス・ラハス教会の
入り口前にある大きな広場は、
峡谷に架かる橋の上に位置する。
アーチ型の天井を持つ
下部構造は、もちろん教会を
支える基盤の役割を担うが、
その内部には礼拝堂と
博物館が設けられている。
［当ページ］
（上）教会は山腹に
直接建てられているため、
内部正面奥の壁面は、全体が
ごつごつした岩になっている。
ここに、幼いイエスを抱く
聖母マリアの姿があらわれた
という。現在、聖母子画は、
壮麗な壁龕に囲まれ、その前に
祭壇が置かれている。
［次ページ］
（右）濃灰色と白の花崗岩で
構成された華麗なファサード。
入口の扉の上には、歴代司祭の
モザイク画が掲げられている。

コロンビア南西部、緑茂る丘に立つラス・ラハス教会を初めて見た人は、驚きのあまり、いったい誰が、なぜ、どうやってこんな場所に建てたのか、尋ねずにいられない。この壮観な聖堂は、グァイタラ川の深い峡谷にあり、雪を頂くアンデスからアマゾン盆地に注ぐ急流をはるかに見下ろす橋と一体となって、川をまたいでいる。

この特筆すべき教会に「ラス・ラハスのロザリオの聖母の聖堂」という正式名称が付けられた由来は、18世紀にこの場所で起こった奇跡に遡る。物語には諸説があるが、最も有名なのは、1754年9月の暗い夜、マリア・ムエセス・デ・キニョネスという名のアメリカ先住民の女性とその聾唖の娘ロシータが、谷を越えようとして嵐に巻き込まれた、というものだ。母娘は、ふたつの大きな岩の下に張り出した場所に避難した（ラス・ラハスの「ラハス（lajas）」はスペイン語で岩を意味している）。その時、ロシータは人生で初めて声を発し、「ママ、女の人が私を呼んでいる」と叫んだ。彼女が上方を指さすと、稲妻が走り、岩に出現した幼いイエスを抱く聖母マリアの姿を、閃光が照らした。

聖母マリアがロシータの前に姿をあらわしてから5年後、岩にあらわれたマリアの絵を守るために小さな礼拝堂が建てられ、巡礼者が訪れるようになった。この藁葺き屋根の質素な堂を建てたのは、イピアレスという近くの町の牧師、フレイ・ガブリエル・デ・ビジャフエルテだった。彼は、この奇跡を布教活動に活かそうと考えたのだ。最初の礼拝堂は1796年まであったが、その後、1803年に石造りの小さなドーム型のバシリカ聖堂に建て替えられた。軍人で地図製作者でもあったマヌエル・マリア・パスが、1853年にその外観を描いている。

奇跡と癒しの噂が広がり、寄進が増えると、エクアドルの建築家マリアノ・アウレスティアとシモン・アタブマが、より大きな教会堂を設計した。1862年に完成した礼拝堂は、オオツリスドリの吊り巣の形を模したことから「オルベンドラ」（スペイン語でオオツリスドリの意）と呼ばれ、現在のネオゴシック様式の建築物になるまで、聖母マリアを祀る聖堂となった。

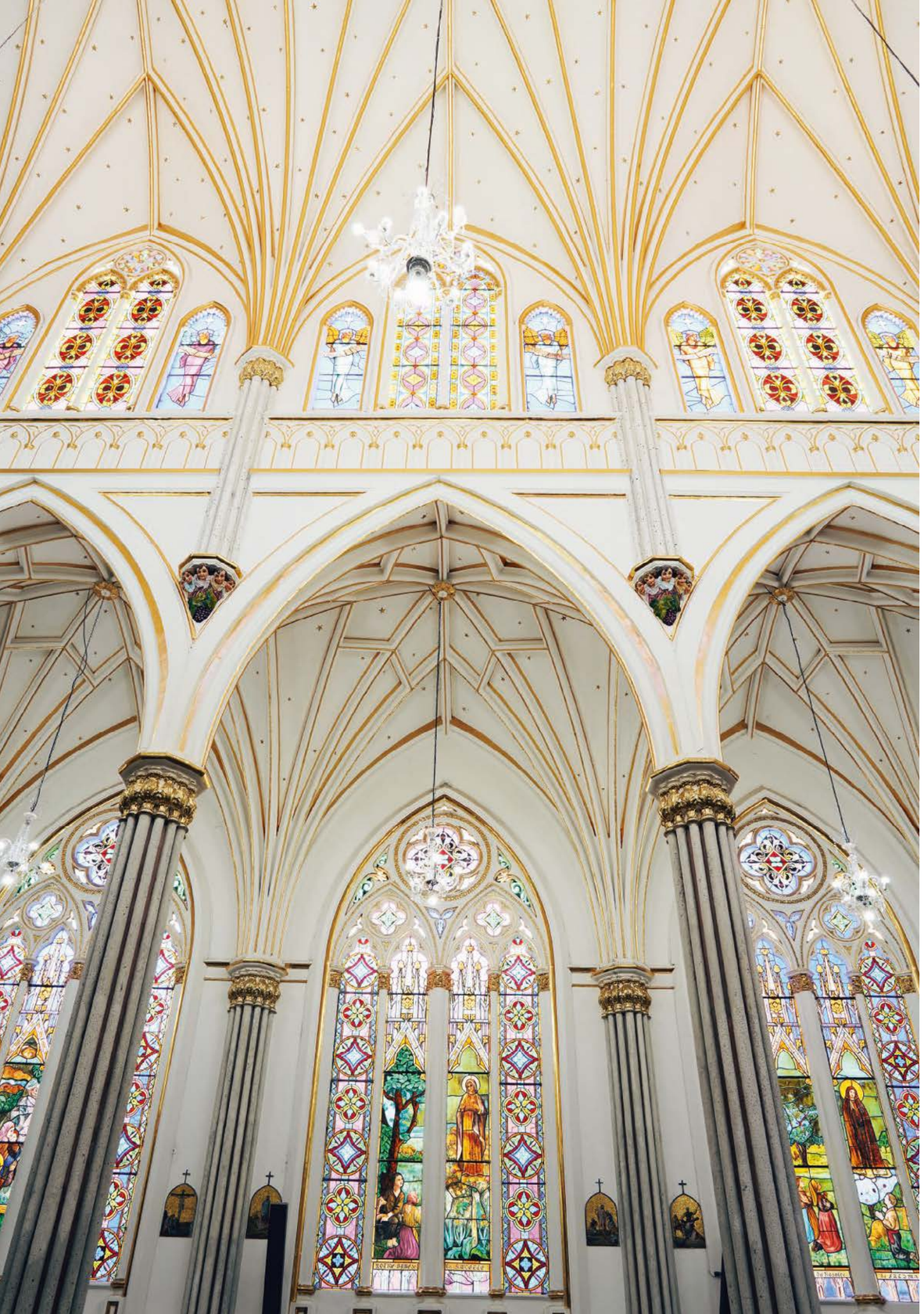
金などの希少鉱物の採掘ブームによって、この地域は、19世紀の終わり頃までに、コロンビアで最も裕福な地域のひとつとなっていた。それら新興の富裕層が、教区司教のフライ・エゼキエル・モレノに、カトリック教会が南北アメリカでいまだかつて行ったことのない、大規模な建築プロジェクトを立ち上げることを後押しした。当時、毎年何千人もの巡礼者が聖堂を訪れていたが、教会自体の拡張は困難なため、聖堂を峡谷の対岸に向けて拡張するプランが検討された。しかし、その計画が実現する前にモレノは他界し、後任のレオニダス・メディナは、隣国エクアドルの建築家J・グアルベルト・ペレスに設計を依頼した。

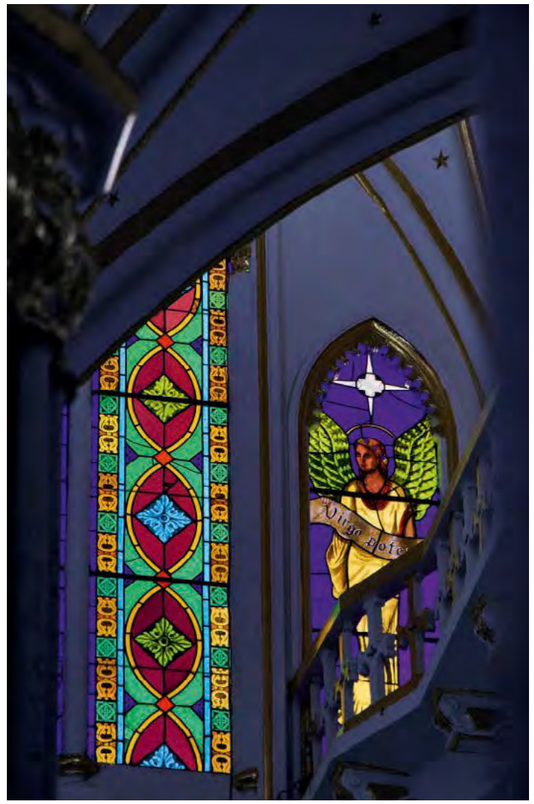
ペレスは、教会堂を峡谷に向けて80メートル拡張する野心的な計画を打ち出し、橋を兼ねる幅20メートルの広場を設けた。この広場は、はるか下の急流から40メートルの高さにある。設計は1914年に承認され、当時としては大金の10万ゴールドペソの予算が割り当てられた。司教の祝福と、地元の司祭ホセ・マリア・カブレラによる厳重な警戒の下で、1916年1月1日、新たな聖域に最初の礎石が据えられた。新しい教会堂を支える巨大な基礎を築くため、何千人もの労働者が10年の歳月を費やして、近隣のポトシの石切り場から花崗岩のブロックを運んだ。

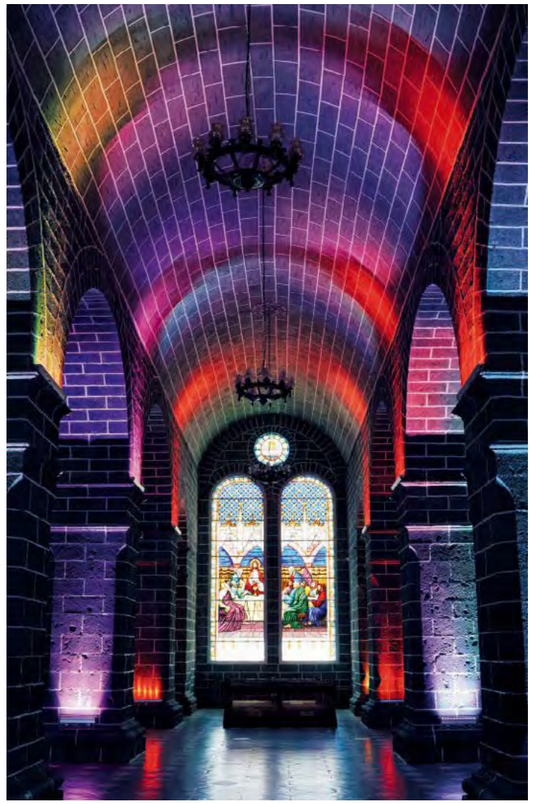
最初に架けた橋が崩落したり、教会の巨大な下部構造でアーチのずれが見つかったりするなど、建設は度重なる災難に悩まされた。もはやこれまでという雰囲気が漂うなか、1924年に起用されたひとりの建築家が、問題点を修正し、事業を本来の道に戻した。彼は名をルシンド・エスピノサといい、ラス・ラハスから北に50キロのパスト市の出身で、独学で建築家になった。彼は下層階級の出身だったが、建築プロジェクトの会計主任を引き継いだ市の司教アントニオ・マリア・プエヨ・デル・ヴァルが、その才能に目を留めた。宗教建築への情熱と聖母マリアへのひたむきな献身を共有するふたりは、残りの人生をラス・ラハスに捧げることになる。

J・グアルベルト・ペレスが描いたロマネスク様式の設計図を検討した司教は、平凡過ぎて心に響くものがないと考え、エスピノサは、より装飾的なネオゴシック様式の設計に取りかかった。地元の建設業者には複雑な工事は無理だ、という先任者の懸念を退けた彼は、最終設計に鋼鉄とセメントを用いた彫刻的なスタイルを取り入れた。新しい設計図は、1936年にバチカン

*「ママ、女の人が私を呼んでいる」と
ロシータが上方を指さすと、稲妻が走り、
岩に出現した幼いイエスを抱く
聖母マリアの姿を、閃光が照らした。*







に承認される。建物の複雑さを際立たせるため、すでにある教会堂を完全に取り囲むように、新しい聖堂の外郭が建設された。1945年にエスピノサが他界すると、息子のジュリアンが後を引き継ぎ、建設を完了させた。ジュリアンは、新しい聖堂内に残った古い教会堂の解体も指揮している。細心の注意を要するこの作業は、1946年に成功裏に完了したが、ひとつだけ問題が残った。新しい聖堂の中心が、古い教会堂に取り囲まれていた聖母マリアの奇跡の絵から少しずれていたのだ。

完成したラス・ラハス教会は、他に類を見ない建築物だ。フランスのルルドの聖母の聖域を彷彿とさせる（着想の発端はおそらくそこにある）が、壮観なロケーションが聖堂の威容を際立たせている。そして、重量感のある堅固な下部構造が、上に載る聖堂の精巧優美な装飾や尖塔、小尖塔と好対照をなしている。教会堂を引き立てる装飾は、ドイツの芸術家ウォルター・ヴォルフ・ワッサーハウエンによるもので、ステンドグラスの窓には、メキシコ、フランス、イタリア、そしてコロンビア国内に伝わる、さまざまな奇跡の聖母マリア像が描かれている。外に目を向けると、彫刻家マルセリアーノ・ヴァジェホ・モンテネグロが、1939年から聖堂落成の1949年にかけて製作した、32体の大理石の大天使像、智天使、音楽の天使が橋を飾っている。

カトリック教会で最高位の栄誉を与えられたラス・ラハス教会は、カトリック教徒が多数を占めるコロンビア国民の共有する思想のなかで地位を固め、さらに多くの巡礼者を集めている。聖域に向かう階段の壁は、無数の奇跡に対する感謝のしるしとして信者が毎年奉納する幾千もの大理石の銘板で埋め尽くされており、その数は増え続けている。審判員、兵士、警察官、裸足の巡礼者、大統領、政治家などさまざまな人々の謝辞が刻まれた銘板のなかに、教会の東のファサードという特権的なポジションにしては、簡潔なメッセージで目を引くものがある。「記念碑を探すなら、周りを見回してご覧なさい」という、ロンドンのセント・ポール大聖堂にあるクリストファー・レン卿の墓碑銘をなぞらえた言葉だ。それは、ラス・ラハス教会の見事な設計を成し遂げた名匠ルシンド・エスピノサが、この建築物でいちばんの見どころとなる部分に向けて捧げた、慎ましい一礼だった。そこに傑作を生み出そうとする想像力を彼にもたらした、驚くべき自然環境のことである。

［次ページ］
身廊から見た南側通路。白と金色を基調とする教会内部は光に満ち、各地に伝わる聖母マリアの奇跡を描いたステンドグラスの窓を、ネオゴシック様式のアーチが取り囲んでいる。

［当ページ］
切石造りのロマネスク様式の地下には、博物館とイエスの聖心に捧げられた礼拝堂がある。